

# 仕事をふりかえって ～ 25 年間の資料収集

河 野 穰

仕事をふりかえるのはきびしく、苦しい。ここでは資料の収集についてふれてみる。

45 歳の時研究の方式を変えた。

- 1) 手をつける範囲をひとつに限定する。
- 2) 研究があまり行われていないテーマを選ぶ。
- 3) 領域をできるかぎり狭め、深く掘りこんでいく。
- 4) 一次資料に基づいた歴史研究とする。資料の発掘・収集に労力と時間の 1/2 を費やす。
- 5) テーマを「FIAT における労使関係」にしぼる。
- 6) わずかな知識を付け加えることだけを目的とする。研究がいずれかの方面で役に立つというようなことは考えない。

研究を着実にすすめるために、つぎのことを自分に課した。

- 1) 5 年間に一冊は書物としてまとめる。
- 2) その間、10～12 本の論文を書いていく。
- 3) 執筆可能な場をすべて活用する。
- 4) 論文は締め切り前に仕上げ、即、つぎの論文にとりかかる。

- 5) 発表の場がなくとも、論文の執筆はすすめる。
- 6) 研究を口実に、授業、教育のための協働活動、学内の仕事をおろそかにしない。

どの国の労使関係も、ある時点において、ある枠組を形成している。労使紛争をスムーズに解決し、過激なイデオロギーや運動から労働組合を切り離すための枠組である。それは時間の経過とともに新しい枠組に転換する(この捉え方は戸塚秀夫、徳永重良両氏の研究グループで学んだ)。

こうして『イタリア自動車産業における労使関係の展開』、 - 上下、 - 上中下を仕上げた。各巻の簡単な内容と資料はつぎのとおりである。

『第 巻』 19 世紀から 20 世紀にかけて企業レベルで行われていた交渉と協定の締結が漸次、産業別レベルに、また全国レベルに進んだ。イタリアではとりわけイデオロギーの対立が顕著で、社会民主主義と革命的サンデイカリズム、社会民主主義と共産主義の対立があり、これにファシズムも加わった。

使用した一次資料は金属機械労働組合の機関紙“*Il Metallurgico*”、FIOMの大会議事録集、工業家組織の年報“*La Lega Industriale*”などである。“*Il Metallurgico*”の入手には苦勞したが、イタリア国立図書館に依頼してマイクロフィルムを購入した。

『第 卷 - 上下』 ファシスト運動には諸潮流があり、企業主と労働者の協調組合を権力構造の骨格に据えようとする立場もひとつであった。ファシスト組合運動家がこの立場を担った。協調組合という形式は1934年に取り入れられたものの、ファシスト国家はナショナリズムを中心とする独裁体制で、運動のなかの思想とは無縁であった。他のイデオロギー、理想主義の結末と同様の道を辿る。ファシスト労組だけが承認され、産業別に整然と組織された。ストライキとロックアウトは禁止、集团的紛争は力で抑えこまれた。労働協約は形式が整えられ、その形式はファシズム以降も継承されている。ただ個別的紛争は抑えようもなく、膨大な数にのぼった。ファシスト労働組合は、フィドゥチャーリオ(従業員代表)、ドーポラボーロ(仕事のあとに労働者が憩う場)等と共に、労働者の同意を求めるチャンネルとはなりえた。

使用した一次資料はファシスト労働組合の機関紙“*Lavoro d'Italia*”、“*Lavoro Fascista*”、入手経路は“*Il Metallurgico*”の場合と同じである。

『第 卷 上』 ファシズム体制の崩壊および新しい労使関係の枠組を扱っている。

ファシズムに対する武装レジスタンス闘

争をへて共産党系、社会党系、カトリック系は統一CGILを結成したが、3年後カトリック系、社会民主党系が分離し、CGIL、CISL、UILという3つのナショナルセンターとなる。戦闘が継続されているなか、労働条件の確定はまず労使ナショナルセンターによるConfederazione間協定が担う。これと並んで大企業では企業レベルの協定も締結される。産業別労使組織による交渉、協約の締結は、金属機械産業では4年以降のことである。多くの工場で経営者が追放されて臨時代表者が任命される。労働者が蜂起して工場を破壊からまもった所では企業内国民解放委員会が大きな発言力をもつ。労働者の企業管理への参加チャンネルとして経営評議会が設立される。レジスタンス闘争に参加していた者が工場に吸収されたが、彼らにとって政治闘争が第一義であった。工場内の規律は著しく低下し、規律を回復しようとする工場側との緊張が続く。FIATにおいて緊張に終止符がうたれ、一定の安定が回復するのは1955年の内部委員会の選挙においてFIOM(左派の金属機械労組)の得票率が前年の63%から37%に落ちた時であった。

この時期の一次資料の中心はFIATにおける交渉の記録、企業協定、配布されたビラ、経営側の掲示、通知などである。トリノのFIOMがピエモンテ・グラムシ研究所に整理・保存を委託した膨大な資料のなかから選んでコピーしたものである。ここへ辿りついたことは行程の1/2を越えたことを意味した。経営評議会をめぐる動きについてはConfindustria(工業家総同盟)が収集していた資料集をさぐりあてた。

『第 巻 - 中』 ファシズム崩壊後に形成された労使関係の枠組は60年代末に終焉し、新たな枠組が生まれた。68年のフランスの5月以降、学生の反乱が世界に広がり、イタリアでは工場に波及した。反乱は資本主義的労働組織への闘いであるとともに、既成の労働組合への闘いであった。反乱に対処するため労働組合側は工場レベルの要求をラディカルにし、職場で恒常的に交渉を進めた。企業内の従業員組織を稠密な職場代表の構成する工場評議会に替えていく。労働の規律は弛緩し、オイルショックも加わって物価は高騰、経済は低迷する。恒常的・継続的な紛争を基盤とする労使関係が継続し得ないことは幹部レベルでは早くから認識されていた。労組幹部は賃金要求を自制し、生産現場の紛争を企業の投資への関与に移そうとした。78年のエウル路線はこの方向の確認であるが、幹部の認識で方向が変わったわけではない。70年代の紛争継続型労使関係は80年秋のFIAT大紛争における労働側敗北によって終焉するのである。この紛争の敗北に加えてスカーラ・モービレをめぐる対立とその結末が労働側の力をさらに弱める。共産党系労組と他の労組は二手にわかれて激しく闘い、従業員代表の選出が行われない工場もでてくる。

この時期の一次資料は“Rassegna Stampa”である。各新聞、各雑誌から労使関係に関わる部分を集めた3つのナショナルセンターによる日刊の資料集である。80年秋FIATの紛争については“La Stampa”を、経営側のスタンスについてはConfindustriaの機関紙“Organizzazione Industriale”を

利用した。

『第 巻 - 下』 70年代の労使関係に替わる枠組再構成のプロセスを扱っている。緩慢であったが再構成を進める条件も成熟していた。第1は社会民主主義に転換しようとする共産党内部の動き、第2はECの統一強化、とりわけ通貨単一化の動き、第3は深刻な失業問題に対処する必要などである。労使関係再構成において大きな役割を果たすのはConfederazione間協定である。80年代の同協定はスカーラ・モービレ、若者の職業訓練、訓練労働契約に集中している。これらの協定のなかで労働側も所得政策を受け入れていく。企業内従業員代表制を再確立しようとする論議も労働組合において進む。こうして93年7月23日の政労使間プロトコルが新しい枠組を確認し、同年12月には統一組合代表に関するConfederazione間協定も締結される。だがイデオロギーの対立も続く。共産主義に固執する部分も少なくないし、労働者主義派、サンデイカリストも活動している。

この時期の一次資料はCISLの日刊機関紙“Conquiste Del Lavoro”、CGILの“Rassegna”、70-90年代のConfederazione間協定、同時期のFIATにおける企業協定等である。

一次資料の収集は時間のかかる仕事であった。マイクロフィルムの購入も簡単なことではない。マイクロリーダーによる読み込みも難儀であった。現地でコピーを取る仕事は更に時間を要した。インターネットの時代に入り資料の収集は容易になった。時の経過を痛感する。